

第三百十三回 青葉会

平成二十四年四月二十六日(木) 午後六時〜九時

丸紅来客食堂「談話室」

〈選者〉 ☆ 川合万里子 先生

〈出席者〉 伊賀山そらお 石川清 今井紀久男 大林猛 小川恭延 柿崎忠彦 久米五郎太 小西弘子

豊田ゆたか 中野一灯 山崎亜也 山内天牛

小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 福島正明 古田昇 南平和夫 宮内規雄 渡邊盛雄

赤田堅 川口孤舟 庄司龍平 高橋敏郎 橋口隆 早川允章 福島正明 村田くに子

山崎青史 山本三恵

ゴシックは選者の天

《選者吟》

草の芽やブロック塀の風穴に

万里子 (堅・清・ゆ・一・く)

置き去りの雑誌を捲(めくる)る春嵐

全 (忠・孤・敏・天)

花の宴果てて駅前ライブかな

全 (孤・正・亜)

芽柳に額(ぬか)を触れつつ人出中

全 (弘・ゆ・三)

二年生入学式を先導し

全 (堅・そ・忠)

《互選句》

七点 ☆ 流失の街かも知れず蜃気楼

昇 (万・猛・孤・敏・正・亜・青)

(青↓「蜃気楼流されし町天に浮く」では?)

六点 ☆ 佛よりさくら談議の三回忌

天牛 (万・猛・弘・正・く・青)

(正…「の」より「や」の方が良い)

五点 ☆ 夜具に肩すっぽり包み花疲れ

弘子 (万・清・恭・龍・天)

向う岸いつもの夫婦春帽子

堂哉 (堅・清・敏・青・三)

(青…三段切れなので上五↓「向う岸に」とするのが良い)

四点 ☆ 許されぬ嘘もありけり四月馬鹿

昇 (万・孤・ゆ・允・く)

池の端行きつもどりつ春惜しむ

そらお (恭・五・く・亜)

雨だれを静かに受ける春の土

全 (堅・猛・忠・孤)

桜狩病む身なれども抗(あらが)へず

恭延 (清・紀・猛・忠)

芍薬の長き茎折り三回忌

五郎太 (紀・龍・く・三)

癌手術(オビ)に気持ちの揺れる紅椿

紀久男 (龍・允・正)

(正↓中七「揺れる気持や」か?)

美術館出でさ緑の中に入る

恭延 (ゆ・允・三)

☆ 校庭の白線新たな花満開

忠彦 (万・恭・敏)

☆ 神主に散る花の添ふ地鎮祭

全 (万・そ・弘)

(☆…中七が動詞名詞動詞となるので↓「花の散り添ふ」)

人は逃げ家畜は死せり桜道

全 (一・隆・正)

同時代生きて桜と象はな子

弘子 (紀・五・三)

朱鷺の雛にな吹きそ降りそ春嵐

恵洲 (紀・恭・弘)

(恭…「にな」否定)

コツブ酒煮汁かけ継ぎ眼張煮る

堂哉 (清・一・允)

今朝釣りし鯛の刺身や島の宿

ゆたか (堅・龍・青)

(青↓上五「今朝釣りの」の方がいい)

花筏恋の見取図消して行く

正明 (孤・五・隆)

雪洞に碑文谷署の名花盛り

天牛 (弘・允・青)

(青↓「雪洞に碑文谷署とある宵桜」では?)

すれ違ふ乙女の香り初夏の風

そらお (一・く)

「熊谷陣屋」

碧眼も喝采花の團十郎

紀久男 (恭・敏)

二点

☆周年の行事終えたり春深し  
 ポトマツクへ花の香つなぐ偏西風  
 覆ひ切れぬ川の濁りや花筏  
 ☆背負児の頬にひとひら桜花

(☆…下五の座わりがよくない↓「朝桜」or「昼桜」)

図書館の窓辺さくらの花明り  
 眼(まなこ)剥き黄砂吸ふ阿の仁王像  
 常念岳(じょうねん)の楡形見やる道祖神

(安曇野)

パスワードを忘れ只管(ひたすら)花に酔ふ  
 鯉幟風に吹かれて尻尾巻く  
 花冷や遥かな友に手紙書く  
 上々に身も肥えゐたり蜆汁

(青…上々にという表現が面白い)

一点

とりよせの逸品とやら目刺焼く  
 花冷や車の講習ほけ検査  
 ドライブの行く手阻むや花の舞ひ  
 春暑し足ばたつかせ赤児泣く  
 富士を看(み)八ヶ岳(やがた)を眺めて花めぐり  
 漣(さざなみ)が漣追つて雲雀啼く

縁なしと思ひし吾に花粉症  
 春疾風(はやて)帽子目深に坂下る  
 桜蕊掃きたる庭に又降るる  
 ☆山桜古道を辿るふたりかな  
 開演すチャタレイ夫人は紫木蓮  
 道行の姉さん女房春芝居

(お軽勘平)

☆花守の何か入れたる古茶箱  
 (☆…もつと具体的に)

バベル超ゆ高塔初夏の天を突く  
 真鶴や荒磯(ありそ)に光る春の波  
 陽炎の中に出(い)でゆく医者(い)の門  
 七味買ふ光琳波の花衣  
 種袋挟む割箸(あざ)に挿す  
 花吹雪樹下の老木花積もる  
 やはらかき色と齒ざはり分葱(わけぎ)賞ず  
 去年(こぞ)懸けし巢箱馴染みてつがひ待つ  
 勇気こそ未来をつかむ新社員  
 それぞれに浮き沈みゆく花筏

五郎太 (万・亜)  
 健介 (恭・忠)  
 恵洲 (猛・龍)  
 ゆたか (万・そ)

一灯 (そ・龍)  
 全 (五・敏)  
 全 (允・亜)

正明 (万・紀)  
 和夫 (清・五)  
 規雄 (隆・正)  
 亜也 (青・天)

全 (ゆ・三)  
 天牛 (忠・ゆ)  
 清 (猛)  
 全 (天)

猛 (紀)  
 全 (亜)

全 (弘)  
 恭延 (そ)  
 五郎太 (隆)

全 (万)  
 弘子 (紀)  
 全 (紀)

全 (万)  
 健介 (一)

ゆたか (そ)  
 全 (一)

一灯 (五)  
 全 (天)

和夫 (堅)  
 亜也 (天)  
 全 (龍)  
 盛雄 (紀)  
 全 (隆)

●次回青葉会

五月二十四日(木) 午後六時〜九時

(丸紅 談話室)

▲当季雑詠各自五句。投句は二句

六月二十八日(木)

七月二十六日(木)

一 平成二十四年四月句会報

今回は万里子先生以下13名出席。投句8名。久しぶりの恭延さんと病状や食堂正面に見える大きな石楠花等について話し乍ら句会に入りました。いつも司会役の弘子さんが快調に進め、御覧のように昇さん、天牛さんらが高得点でした。

いつものことで気が引けますが、旨い地酒：五郎太さんの純米大吟醸「太平山」（秋田）、亜也さんの純米大吟醸「喜楽長」（東近江）、小生の吟醸「笹の川・ほろ酔」（郡山）。先生お手製の五平餅（お庭のごごとと露の臺入り）、弘子さんの金沢土産（森八のどら焼）そして小生の焼酎ボンチヨコ「百年の孤独」（宮崎）と持込み寄贈が沢山ありました。恭延さん忠彦さんが酒を控えておられるので一寸お気の毒でした。

二 関係者近詠

七草の名札新し野草園

万里子

みちのくの酒選びたる花の宴

盛雄

寝過しの素顔も隠すマスクかな

全

一日経俳壇4月15日

黒田杏子選

葛湯佳し年を取るほど母に似て

全

宅配を解くより零る春の土

奥西邦夫

残雪を蹴り合ひ燥ぐ下校班

全

胎動は土の中より冬木の芽

有馬朗人選

梅含む空の青さや床払ひ

全

それぞれに羅針盤持ち鳥帰る

孤舟

快気祝ぐ膳に鱻の青光り

全

春満月陶の狸と酌むとせむ

全

町内に芥川賞作家春隣

眞希子

黎明の地球は丸し流水来

全

菜飯なか常備菜輝き手弁当

全

歳時記を割り初蝶を放ちけり

全

聖句葉欲しくて出席シクラメン

全

「爽樹」5月号

全

初午や芽をもつ蓮根神饌に添へ

弘子

「加賀鳶」や九谷に盛れる蛍鳥賊

允章

母は子を歌にも包む冬桜

全

犀川の水清らかに柳の芽

全

駄々つ子へ父の微笑青木の実

全

春うらら黒光りする能登瓦

全

春茜目指し家路を辿りけり

恭延

白子（しらす）食ふこれ皆命と思ひつつ

恵洲

東風吹けば踏切の音カンカンと

和夫

相合傘女同士や春時雨

全

彼岸桜ぼんぼりつけて甲夜かな

全

胸を張る様思はせて囁れり

全

シーベルト測る校庭草青む

忠彦

遅れしが一気呵成の桜かな

堂哉

暖かや神の手託しご快復

全

春風や「本日休診」愛車駆る

全

鬼やらひ吉三の台詞所望さる

紀久男

花の庭老ひし仲間の祝婚歌

全

「萬緑」5月号

「お忘れ物なきよう」声残りおる春小路

彦十

（飯田橋「卯の花」の亭主を偲んで）

三 中村草田男句碑

●空は太初の青さ妻より林檎受く・・・4月8日（日）萬緑多摩句会の井の頭公園吟行に参加して句会場（吉祥寺西コミュニティセンター分館）近くの成蹊学園構内にある句碑を拝見しました。句碑の類は小生興味なく敬遠しておりましたが、この句碑は同学園の櫛並木の下に小ぢんまりと道端にあり、好い感じです。句碑は昨年10月同学園創立100年の記念に建てられたもので、除幕式の模様は毎日新聞や俳誌に大きく報じられております。

万里子先生によれば、草田男は生前句碑の建立を好まなかつたので、同世代の高名俳人に比べ、その数は極く少い由です。「一番好きな俳人」アンケート結果を朝日新聞が4月28日（土）に大きく掲載しております。ランキングは芭蕉・一茶・子規・蕪村・虚子・山頭火・黛まどか・汀女・兜太・秋桜子・誓子・草田男・蛇笏・真砂女・放哉の順です。草田男の人氣が今なお高いことと、現役で黛まどかがトップであることに驚いております。

●草田男句碑所在地一覽

炎熱や勝利の如き地の明るさ（青森・五所川原）

萬緑の中や吾子の齒生え初むる（東京・調布）

一度訪ひ二度訪ふ波やきりぎりす（松山）

冬の水一枝の影も欺かず（東京・立川）

夕櫻城の石崖裾濃なる（松山）

蜻蛉行くうしろ姿の大きさよ（安曇野）

降る雪や明治は遠くなり（東京・青山）

平成二十四年五月十三日

紀久男記